



# ふるさと 便り

～町長室から～

## 大熊町データ

【人口】  
10,572人  
(平成29年7月31日現在)  
【面積】  
78.71km<sup>2</sup>



大川原連絡事務所



大川原地区の東京電力社員寮



『大熊食堂』の内部



## 苦難を乗り越えてきた 6年間

平成23年3月11日の東日本大震災から6年が過ぎました。翌12日には東京電力福島第一原子力発電所の半径10km圏内に避難指示が出され、当初、私たち町民は、田村市、三春町、小野町、郡山市に分散しての全町避難を余儀なくされました。その後、避難生活が長引くことが想定されたため、どこか落ち着いた環境で、町も町民も今後について考える拠点が必要だと思いい、4月3日・4日に会津若松市へ二次避難をし、大熊町役場は会津若松市の旧高校校舎に出張所を構えることとなりました。現在は、いわき市や郡山市などにも出

張所や連絡事務所を置いています。この6年間は、本当に大変な歳月でした。全町避難後、田村市総合体育館に災害対策本部を再設置し、各避難所の運営に奔走する中、私も職員も「今日はどんな一日になるのか」という不安な思いで、一日一日を過ごしております。

本年3月に、東日本大震災後6年間の町の記録をまとめた「大熊町震災記録誌」を発刊いたしました。それを読み返しますと、町民の皆さんは大変なご苦勞をされ、これまで本当によく頑張つてこられた、と改めて感じております。

加えて、職員に対しても、これまでの道のりを振り返ると「本当によくやったな、頑張ったな」と

褒めてあげたい気持ちです。一つをクリアすると新たな課題が出てくるなど、かつてない試練の連続でした。簡単には言えませんが、私も職員も「自分たちが町を背負っている」「守らなければならぬ」「復興をするのだ」という責任感や使命感に、突き動かされていたのではないかと思います。

以前、関西から会津若松を訪ねてこられた方が、「この避難生活をよく頑張つておられますね。他の土地の方はここまで頑張れないかもしれない。会津に来て、辛抱我慢に花が咲く、ということを抱我慢に花が咲きました」という言葉をかけてくれました。そこには、

長い冬を耐えて春を迎えるという東北地方の気候・風土が、我々の

忍耐強さを育ててくれることがあったのかもしれない。

## 「町民の心の復興」と「町土の復興」を目指して

平成26年3月、『大熊町復興まちづくりビジョン』を公表し、その1年後には『大熊町第二次復興計画』を策定して、「避難先での安定した生活の確保」と「帰町を選べる環境整備」の二つを大きな柱として、復興に向けた取り組みを進めてきました。

「避難先での安定した生活の確保」としては、避難先での生活再建支援、町民同士の絆の維持、コミュニティ支援など、様々な取り組みを通じて町民の皆さんの生活再建や「心の復興」に尽力してきました。しかし、町民の皆さんの現在の暮らしや、必要な支援も同じではなく、これまでの支援に對

する受け止め方も様々です。全てのニーズにお応えするのは非常に難しいことですが、それでも諦めることなく、皆さんに寄り添う姿勢を大事にしながら、これからの道を模索していきます。

「帰町を選べる環境整備」としては、大熊町の大川原地区において復興拠点の整備を進めていきます。現在、大川原地区には東京電力の社員寮や、廃炉・汚染水処理・中間貯蔵施設関連の民間事業者の事務所が整備され、そこで約3,000人が働いています。また、『大熊食堂』という飲食の施設や、給食センターも整備され、町内で働く人々に温かい食事が提供できるようになっています。平成30年度末までには役場の新庁舎の整備を目指しており、これに合わせて商業施設や医療機関などの整備も段階的に進めていく方針です。まだまだ町民の皆さんが帰還し



整備が進む大川原地区



大熊町会津若松出張所



田村市における災害対策本部の様子

## 町内外の人々と 若者の力でまちを再興

て生活できる環境は整っていませんが、「線量が下がった」ということ以上に、「現地で働いている人がいる」という事実には説得力があると思えます。そのような「目に見える動き」があるため、「帰れるかもしれない」という希望をもてました」という町民の方の声もいただきました。時間はかかっても、町民の皆さんが町への帰還を選べる環境整備を進めていく考えです。

かつて、現在の福島県浜通り北部に相当する相馬中村落は、天明の大飢饉に見舞われた際に人口の大半を失ったのですが、現在の北陸地方から農民の移民を受け入れて人口を回復させ、藩を立て直してきた歴史があります。このように苦しい時代を乗り越えてきた歴史は、どこの地域にもあるでしょう。ですから、これからの大熊町でも新しい人たちを受け入れながら、元の町民と共生して再興させることができるはずですよ。

めていきたいと考えています。新しいまちづくりや、外からの人々の受け入れに対して、「それは本当の大熊町じゃない」という声もあります。確かに、昔を受け継いでいくことは大事です。しかし、それだけでは活気が生まれません。大熊町外の人たちの力を得ながら、自分たちも力を発揮し、まちを復興させていこうという意欲を持つ人が一人でも多くいてくれること、それが、今後のまちづくりには必要です。

とくに次世代を担う若者にそのような意識を持つてもらいたいと願っています。町の若手職員たちによる『ふるさと未来会議』という組織があり、今年で発足2年目になります。そこでは意見交換が活発に行われ、「自分たちが理想とするまちを自分たちで作るんだ！」という意識をもった職員が増えてきました。

また、行政とは別の立場でまちづくりを担う機関として、「まちづくり会社」の法人設立を目指しています。当面は、新規就農希望者と、農地の維持管理をできなくなった町民との間のマッチングなど、遊休不動産の維持管理・活用などの役割も担ってくださることを期待しています。

## 大熊町から 全国へのメッセージ

全国、世界各地の皆さまからご支援をいただいたおかげで、大熊町はこれまで、復興に向けて歩むことができました。私たちがしっかりと前進していくことが、ご支援いただいた皆さまへの恩返しになると思っています。東日本震災以後、マイナスからのスタートでしたが、多くの皆さまからの支援に支えられて、逆境を乗り越え、ようやくゼロの地点に立つことができましたようにも思います。私たちが前に進んでいるのが皆さまに伝わるよう、復興に向けて邁進していきます。(談)

大熊町地域包括支援センターの介護予防事業『男塾』 大熊町社会福祉協議会主催で毎年開催されている『夏まつり』(いわき市内で)



『おおちゃん小法師』の絵付け風景



大熊町のマスコットキャラクター『おおちゃん小法師』



次世代を担う若者を対象にした短期留学の『希望の翼』出発式

